

京極家城下町「小浜と丸亀」

小浜常高寺住職 沢口 輝禪

京極家の先祖は、平安時代初期の宇多天皇にさかのぼります。宇多天皇第八皇子敦實親王が滋賀県北部の佐々木の荘を開いたのが始まりで、代々佐々木を名乗り、近江源氏と称せられました。源平の戦いでも一門の者は活躍し、宇治川の合戦で、一門の佐々木高綱と梶原景季が先陣争いをしたことで有名です。

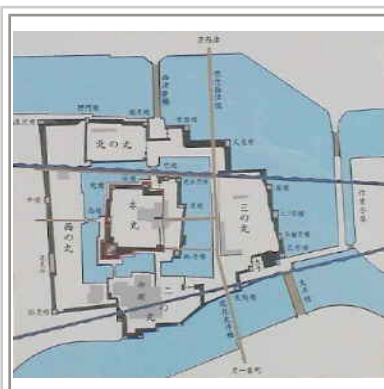
その後、佐々木家九代定綱が、鎌倉幕府より近江守護職を命じられ、さらに一族で西国十数か所の守護職となりました。

十一代佐々木信綱の子が四家に分けられ、六角氏、京極氏などが成立しました。(西暦1220年頃)そのうち京極家は北近江を地盤とし、京極家五代目にバサラ大名として有名な京極高氏(道誉)が出ます。彼の活躍は華々しく、幼年のころから鎌倉幕府に出仕し、幕府最後の執権北条高時に仕え、さらに足利尊氏と共に各地に転戦し、室町幕府成立に寄与しました。そのために山名・一色・赤松の諸氏に並んで四職の一つに数えられるほどになりました。さらに道誉は近江のほか、出雲、上総、飛騨の守護職となり勢力を拡大し、佐々木宗家の六角氏をしのぐほどになりました。しかも道誉の活動は政治の世界だけではなくありませんでした。茶道、華道、香道、歌道においてもすぐれた力量を発揮し、しかも世間の人をあっと驚かせるようなスケールの大きい、奇抜なことをやった人ようです。(たとえば、花見のお茶会で、大人が二抱えするほどの大きな香炉を二つ置いて、そこに香木をじゃんじゃん入れて、京都の人々を酔いしれさせたなど)

しかし、やがて京極家も衰勢に向かい、十五代京極高清の跡目相続をめぐる混乱し、その混乱に乗じて家来筋の浅井家が台頭してついに浅井亮政が小谷城を築城し、京極家十六代高延は小谷城内京極丸(京極屋敷)に庇護される事態になりました。のちに小浜城主となる京極高次は、京極家十八代の高吉と、浅井長政の姉お慶(後の京極マリヤ)との間に小谷城内京極丸で生まれました(1563年)。京極家再興の悲願を背負った高次は、わずか6歳で信長のもとに人質として差し出され、11歳で近江奥島に信長より五千石を賜い、成人後の本領安堵を約束されたのでした。が、高次20歳の頃本能寺の変で信長は世を去り、高次は明智光秀に加担し秀吉の居城の長浜城を攻めました。そのため秀吉に追われて、姉(竜子)の嫁ぎ先の若狭後瀬山城武田元明を頼りましたが、元明も殺され、さらに柴田勝家を頼るものの、勝家も殺されてついに流浪の身となりました。そうこうしているうちに姉竜子が秀吉の側室となり、その必死の願いが功を奏して高次は許されて近江高島郡に二千五百石を与えられたのです。

その後の高次の出世はトントン拍子で、さらに五千石に加増され、その後、大溝城一万石、近江八幡山二万八千石を与えられ、わずか11、2年で大津六万石に出世といった具合でした。大溝城主の時に秀吉の仲介でお初(後の常高院)を娶っております。さして戦功もないのにこのように出世したのは、姉竜子が秀吉の寵愛を受けていたことが大きく、周囲からは女性の「尻の光」で出世したという意味で嘲笑をまじえて「ほたる大名」といわれたそうです。

その後、秀吉亡き後の関が原の戦いではドタン場で徳川方につき、籠城して、豊臣方15,000の兵を関が原に向かわせず、釘付けにしました。その功績を認められて、家康より若狭小浜八万五千石を与えられました。



雲浜古城図
(小浜城)



石垣の美・現存木造天守で
名高い丸亀城

小浜での高次の功績としては通常二つのことがあげられます。一つはそれまでの後瀬山城を廃して、新たに雲浜の地に小浜城を築城したこと。南川と北川と海で三方を囲まれた水城です。さらに内堀もあってそこには海から船が入れる「船入」がありました。現在はわずかに本丸の石垣を残すのみですが、石垣の上に上って見ますと、日本海が見渡せて爽快な気分になります。

次に慶長十二年（1607年）には町割りをおこないます。「小浜市史」によると町の数41町、東西2組に分けられ、税負担をする家数が1237軒であったとされています。「京極氏若狭に封ぜらるるや、従来の山城を廃して、全く近世的の平城を築城し、一方に於いては小浜町の中世以降の発達を益助長すべく元小浜町の西南部を占有せし後瀬山下の城跡及び土族屋敷の全部を市街地とし、市区道路の改正をはじめ、新たに大津町等の新市区を設けて、城下町たるの設備を完成せり」（若狭遠敷郡誌）高次が行った町作りを要約すると、以前から栄えていた丹後街道沿いをさらに整備して商業の町にしたこと、雲浜に築城したことに伴って、町を東の方に広げ大津町、市場町、筒抜町等を作ったこと、また、西津に侍町をつくったことなどがあげられます。

高次は小浜に来て約10年、47歳で亡くなりますが、その小浜での業績を見ますと、行政的力量は優れていた様に思われます。京極家中興の祖といわれるにふさわしい人物であります。

小浜京極藩二代目の忠高は、17歳で父の後を継ぎ、大阪夏の陣、冬の陣に参戦するなどの後、寛永十一年（1634年）松江藩二十六万四千石へ移封となります。ところが、45歳で急死してしまいます。

本来ならばそれでお家断絶でありましたが、高次の大津城での働きなどが考慮されて、高次の次男高政の子高和を跡継ぎとして断絶はまぬがれました。しかし、禄高は減らされて大津の時と同じ六万石で竜野へ移され、さらに丸亀六万石へと移封になりました。（寛永十四年、1637年）丸亀京極藩は高和以降、七代の領主が続いて明治をむかえました。

高次の正室であった常高院が建立した常高寺と常高院にお仕えしていた七人の侍女方が出家して出来た七ヶ寺の尼寺については明治になるまで京極家の管轄下に置かれており、三人の京極藩士が常駐しておりました。



常高院の墓
（常高寺）



丸亀藩士の墓
（常高寺）